

「想定外」発言に思う

理事 小澤 秀子

福島第一原発の事故を巡って「想定外」という発言が相次いだ。事故がこれほどまでに拡大した最大の原因は冷却機能がダウンしたこと、「想定外」の大津波によって冷却水を送るための電気系統が破壊されたためだったという。M9.0の地震でも原子炉は想定通り自動停止し、原発の安全性は立証された。だが大規模な津波によって全ての電源が破損し、働かなくなるという事態は「想定外」だったというのが専門家たちの説明である。

しかし、この地域に大津波は過去に何回もあったし、地震学者たちは早くから地震と津波の危険性を指摘し「原発震災」を警告していた⁽¹⁾。全国に54か所ある原発周辺に住む住民は各地で原発の危険性を訴えて反対活動を行ってきた⁽²⁾。また、一部の原子力研究者もその危険性を報告している⁽³⁾。専門家たちが知らなかった筈はない。決して人知を超えた状況ではなく、わかっているながらあえて外したということになる。何故か？

「可能性があるものを全部組みあわせていったら、モノなんて造れない。どこかでは割り切るんです」これが、原発の監視役である原子力安全委員会（班目春樹委員長）の見解である⁽⁴⁾。「割り切る」とは費用のこと、千年に一度しか起きないことまで想定して安全対策をしたら、コストがかかりすぎる、これが大方の意見だったという。アメリカではスリーマイル島事故を受けて、30年前に見直しの指針を出し、安全規制を修正している。しかし、日本では指針に盛り込むことなく、経済性を優先させた。指針には、「長期間にわたる全交流動力電源喪失は、送電線の復旧又は非常用交流電源設備の修復が期待できるので考慮する必要はない」⁽⁵⁾とある。

かつて日本は、欧米各国からエコノミックアニマルというレッテルを貼られたことがある。戦後の廃墟から立ち上がるために国をあげて経済復興に力をいれていることに対して、アニマルとはひどいと憤慨した記憶がある。最近クールジャパンとか日本の文化に新たな関心が寄せられるなど、エコノミックアニマルの汚名は返上したかに見えたが、コストに拘ってとんでもない人災を起こしてしまった。残念であり、悔しい。

私たちは、今回の原発災害からさまざまなことを学びつつある。国策推進のしくみ、研究者の役割、文科省、マスコミの働きなど、すべてがこれほど明らかになる事例はない。ぜひ若い人や子供たちにも探究してもらいたい。神経を研ぎ澄まして真実をつかむ努力をしてもらいたい。そして、ゆめゆめコストに拘ってなすべきことを省くような愚をしないようにしたい。

(1) 石橋克彦・神戸大名誉教授「原発震災一破滅を避けるために」（1997.10『科学』）

(2) (4)住民による訴訟（2011.4.15朝日新聞）

(3) 小出裕章・京都大原子炉実験所助教『「原発震災」と原子力の黄昏』（2002 理戦）

(5) 「発電用軽水型原子炉施設に関する安全設計審査指針」（1990.原子力安全委員会）

JADECニュース83号（2011.5）より